

『吾輩は猫である』身分違いの恋

Junko Higasa 2017.5.11

この小説は、水島寒月と金田富子の結婚問題が主軸となっている。ここには漱石自身の「博士になれば娘を嫁にやってもよい」という若い頃の体験談が反映されているが、この物語の主人公が「猫」であることを忘れてはならない。そこで、ふと猫にも人間と同じ状況が当てはまるのではないかと考えた。

教師の家の痩せ猫「吾輩」は、裕福な家で人間以上に大事にされている「三毛子」に淡い恋心を抱く。しかし吾輩は三毛子に「先生」と呼ばれているものの、猫の世界に「博士」はなく、頑固な教師の主人が金持ちになる当てもない。寒月君の如く恋の感覚に浸るのみである。そこで二匹を二人に置き換えてみる。

大事な一人娘の婿に、地位か財産を望む金田夫妻の如く、三毛子の主人は、貧乏教師の家の吾輩が気に入らない。愛よりも金と地位。おそらく裕福な家の猫だったら付き合いを許したのではあるまいか。

そして三毛子は病気になって死んでしまう。この病気の背景には、西洋化と共に入って来た病原菌に対応できなかった「日本人体質」と「日本の医療の現状」が反映されているが、これを寒月君に思いを寄せた富子嬢の「恋煩い」に置き換えたらどうだろう。

三毛子は吾輩に恋をした。しかし貧乏教師の家の猫では、主人が許すはずもない。食べ物も喉を通らず恋煩いによる衰弱死。三毛子の主人は二絃琴の師匠、富子嬢の母は三味線好き。内面までも似ている。